

「誰もが生きやすい社会を」

社会福祉法人 邦友会 新宿けやき園にて 嶋田昌功

貴重な戦時中の話を伺うことが出来た。

当事者である先生自身が語って下さったので、当時の状況をありのまま感じられた。どのような立場から考えたとしても、戦争によって得られるものはなく、大切な多くの物を失う行為であると改めて思った。

お話を聞く限り、この当時の聾者の方への扱いは、あまりにも酷いものだった。同じ仕事をしていても、同等の給料以下、それどころか給料自体を貰えない事があったと伺い、とても驚いた。

現在では、多くの方々の尽力により、障害を持つ方々の人権や支援が確立させつつある。この背景は、過去に障害を持つという事だけで虐げられ、その中でも耐え抜き、生き抜いた方々の思いがある事を忘れてはいけない。

そして、現在では手話が広く使われるようになり、聾者の方々には欠かす事が出来ないものである。また特別支援学校の教育では、手話が必須になりつつある。しかし、手話は地域性が強く、多種多様な数の手話法が存在している。

現在、グローバル化が進み、世界の一体化が必要となっている。その為統一した手話法、国際基準の手話が必要になると考えられる。世界基準で物事が進み、他国の方々と交流する機会も増えていくので、確実に必要になるだろう。

映像技術など科学技術の発展により、言葉を文字で起こす機能が増え、聾者含め多くの方々の助けになっている。これは一見手話に代わるツールになると考えられる。

ただ、手話では意味を伝えるだけでなく、そこに思いをのせる事が出来る。いくら技術が発展しようとも、感情を伝えられるのは、その思いを感じ・感じられる“人“だけなので、手話が無くなる事はないと考えられる。

現在、社会制度が発展し、誰しもの権利が認められるようになってきている。また社会の中でもユニバーサルデザインが普及し、様々な施設に行きやすくなってきている。しかしまだ社会の中に、この考えが普及していない部分があると言わざるを得ない。合わせて、自閉症などの見えない障害を持ち、周りから理解されず苦しんでいる方々もいる。

本当の意味でグローバルな社会を目指すなら、他者の問題を自分の事のように考え、慈しむ気持ちを持つ事が大切ではないだろうか。もし、この気持ちをみんなが持てれば、誰に取っても生きやすい社会になのではないだろうか。

(聞き手：早稲田大学公認サークル積木の会 高沼 大貴)